惨！津波のツメ跡

大船渡で17人死ぬ

高田8人　刻々ふえる被害

二十四日早朝、大船渡湾に昭和八年の三陸大津波をしのぐ大津波が襲来し、市内はあびきょうかんのちまたと化している。午前四時半ごろ突然前ぶれもなく、大津波が押しよせ、同六時半現在、大船渡市大船渡町須崎、根岸を中心に、家屋七百戸以上が倒潰流失、確認された死体だけでも十七人、行くえ不明二人、大船渡線の線路七百はハイヤー、家屋が押し流され、居すわっていた二十人以上の漁船が二万トン級を乗りこえ、約千戸はなれた盛駅構内に押し上げられた。

また陸前高田市では死者八人、家屋全壊流失に四百五十戸にのぼっている。午前十一時現在の被害つぎのとおり。

▽大船渡地区＝死者十七人、行くえ不明二人、重傷傷者十一人、家屋全壊一百六十戸、半壊三百五十戸、流失五十戸、床上浸水四百三十戸。

▽高田地区＝死者八人、家屋流失百三十戸、全壊五十戸、半壊二百五十戸、浸水四百戸。

医師派遣

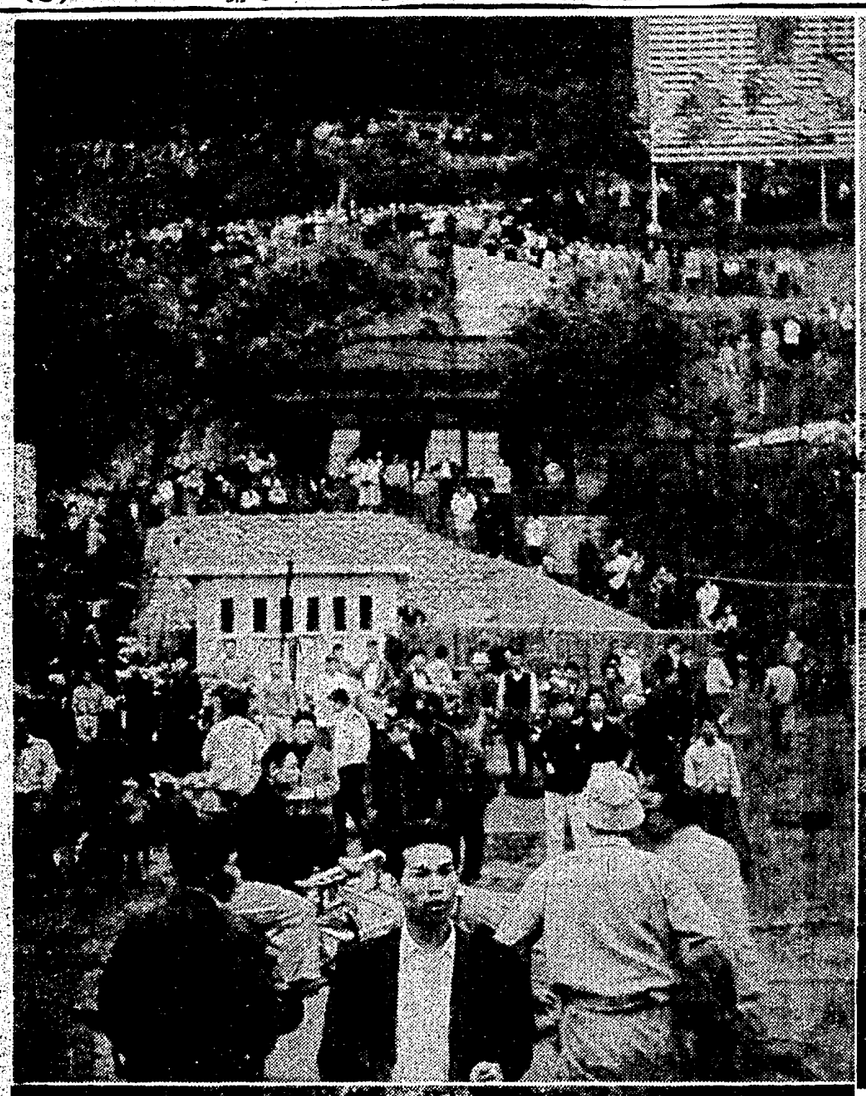
日赤県支部から二十四日午前十一時被害の模ようとの通告、大船渡地方に盛岡や十字病院の松田医師ら救護班八人が派遣された。

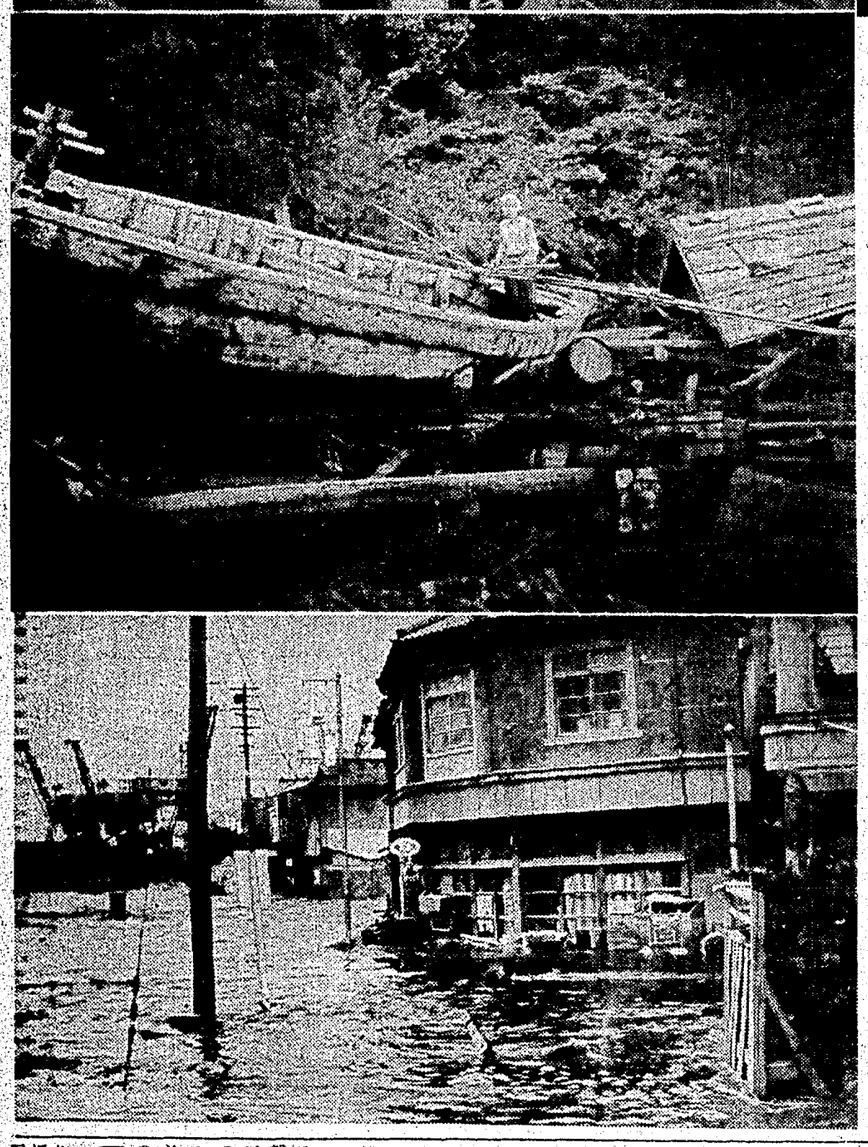
母子三人のまれる

大船渡市須崎の県漁業組合所属照井光男さん(34)の妻せいさん(31)と長男繁雄君(6)長女靖子ちゃん(3)の三人は光男さんが津波警報で守の間に津波に流され、行くえ不明になった。

八戸でも二人

【八戸発】二十四日朝八時、八戸





山のような大波

釜石　起重機もひん曲がる

釜石市と土倉伊那地方は午前四時八分に津波警報が発令され同四時十分高さ約一尺の津波が押し寄せ、さらに同四時三十五分、三尺五十から四尺の津波が来襲、釜石市の浜町、東前町、大町、只越町、松原町賀通り、親住居の両石など一帯は水びたしとなった。また大槌町の安渡、唐丹町の本郷、小白浜など海岸線一帯の部落が波に洗われた。続いて津波は午前五時五分、同五時二十分と続きさらに午前九時まで十二、三回の津波が来襲、各被災地の人々を恐怖のどん底につき落としている。

釜石市と大槌町約三万人は付近の山、高台、学校などに避難した。

鉄道もズタズタ

沿岸線はすべて運休

盛岡鉄局は津波被害の状況で運転整戒のため、二十四日午後一時半から山田、大船渡など沿岸各線区の旅客、貨物全列車の運転を中止した。

各線の被害状況次のとおり（二十四日午後六時現在）

◇大船渡線　陸前高田―脇沢間は道床流失路盤一部流失、レール、マクラ木一部流失、脇の沢駅冠水、脇の沢―小友間は道床と路盤流失、下船渡―盛間は道床流失、詳細不明。

◇気仙沼線　南気仙沼―松岩間は道床流失、松岩―陸前唐土間は道床流失三カ所。

◇山田線　磯鶏―豊間根間浸水、勝司鶏―りょうの石が巻流下、一部流失、道床路盤流失、宮古―臨港間は全区間冠水し道床流失三カ所。

◇大船渡線　陸前高田―脇沢間は道床流失路盤一部流失、レール、マクラ木一部流失、脇の沢駅冠水、脇の沢―小友間は道床と路盤流失、下船渡―盛間は道床流失、詳細不明。

◇気仙沼線　南気仙沼―松岩間は道床流失、松岩―陸前唐土間は道床流失三カ所。

◇山田線　磯鶏―豊間根間浸水、勝司鶏―りょうの石が巻流下、一部流失、道床路盤流失、宮古―臨港間は全区間冠水し道床流失三カ所。

自衛隊も出動

岩手郡滝沢村一本木の陸上自衛隊一個大隊がソーピ二台に分乗、一本木を出発、宮古と大船渡に向け出発した。

また宮古には秋田一個師団の第一大隊第四中隊五十七人、東岡七台が出発した。

百五十戸浸水

宮古　高潮に漁船の衝突

宮古沿岸は午前三時半ごろから津波が押しよせ、宮古警察署、同消防署は緊急避難命令を発令、沿岸民は高台に避難した。閉伊川河口と宮古港湾に停泊中の各種漁船は激しい引き潮と上げ潮のためロープが切れて押し流され、船と船がぶつかり合って破損する船が続出、なかには沈没した船もあり、被害は大きい。

下閉伊川河口付近の新川町では約百五十戸に海水が浸水した。新川町の漁業者々木栄さん宅ではちょうど帰って網起しに出かける時で漁船たちが、河口で大騒ぎしていたが、午前三時半ごろ第一回目、同五時半ごろ第二回目の津波が押しよせたとくに二回目は大きく、押し流された漁船が宮古橋や山田線閉伊川鉄橋の橋脚に激しくぶつかりものすごかった。

鉄道復旧に一週間

盛岡鉄局が災害現地からの情報を総合して二十四日午後二時までにまとめた沿岸地方各線の復旧見込みは山田線磯鶏―豊間根間と大船渡線陸前高田―大船渡間は応急復旧でも一週間かかることがわかった。ほか、次のとおり。

▽八戸線　八戸―陸奥湊間▽山田線宮古駅構内―大槌間は二十五日午前中▽気仙沼線気仙沼―本吉間は二十五日中に開通する。

不意打ちの襲来

中さん（釜石市職員）来盛して恐怖を語る

地震もなく警報遅れる

釜石市鵜住居町浦石の釜石市役所鵜住居出張所職員中源次郎氏＝写真

釜石市鵜住居町浦石の釜石市役所鵜住居出張所職員中源次郎氏は、二十四日市役所の用事で出張したが、正午すぎ宮古日報社を訪ね、同石湾付近の被害状況と恐怖の様子をつぎのように語った。

午前四時ごろ第一波が襲い、気がついたときは床下へ浸水しはじめていた。津波は地震のゆとに襲うものとばかり思っていたし、地震があれば必ずラジオをかけるのが津波被災地の人たちの習性のようになっていたが、今回のは全く不意打ちで、揆子がおかしいラジオをかけたが全然警報もニュースも聞かれなかった。今不意打ちで第一波がきてから避難サイレンが鳴る始末だった。ほとんどハダシのまま逃げたが、波は平均水面より四尺ほど高く押し寄せ、家屋の流失十二戸、破壊三十戸、浸水や漁具はほとんど流された。低地に新居を建て三日前に引っ越したばかりの山陽クニさん(2)

泥海に洗われた災害地

㊤大船渡市大船渡付近の海上に流れる家財㊧㊨高台に避難した釜石市民㊥陸に打ち上げられた漁船＝釜石市鵜住居　中源太郎氏撮影　㊦高潮のため水浸しとなった釜石市海岸通り。

チリ地震の余波

こんどは特異なケース

（同一六二一年）十月二十八日には退潮は三陸沖で南部湾の被害記録はみえないが、仙台藩だけで死者一万二千人をかぞえるという大被害だった。

そのほかいろいろで、延宝、宝暦、寛政年間などに十回の津波が発生しているが、明治年間にはいってからは明治二十九年（同一八九六年）六月十五日の津波（激甚悲惨）で、浪源は三陸沖で、気仙、下閉伊、九戸全郡に被害をもたらした。死者約二万二千人、流失全壊住家が九千三百、もっとも被害の大きかった釜石では、人口約六千五百人のうち、四千四十一人が死亡、六百三十五人が負傷した。

このあと二十七年を経て昭和八年（同一九三三年）三月三日上下前の地震と津波十一時におよぶ大津波押し寄せ、二千七百九人の命をのんだほか、流失家屋二千九百二十戸、全倒壊六百十四戸、半壊五百三十二戸、焼失二百十九戸、床上浸水千二百九戸という被害を与えた。当時の惨状と教訓はいまだに強烈の語り草となっている。

このように過去の大津波被害は全部三陸沖を浪源としており、昭和二十七年三月の十勝沖、同十一月のカムチャツカ半島沖を浪源とする津波は人的な被害はなく、こんどのケースは気象台でもはじめてのケースだといっている。

大気予報

【内閣・沿岸】二十四日夜は南よりの風強りがちだが、南部では所によってにわか雨の降る所もある。二十五日は南よりの風、大体晴れ